

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K20869

研究課題名(和文)元良勇次郎の思想史的研究-宗教と倫理

研究課題名(英文)A study of Motora Yujiro : intellectual history on the concept of religion

研究代表者

森川 多聞(Morikawa, Tamon)

東北大学・文学研究科・助教

研究者番号：70712280

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：明治後期から大正期に至る宗教概念の変遷と成立事情について、元良勇次郎の思想を分析対象として、考察した。元良は、一九〇〇年年より活発化する宗教と教育の衝突論争で、人間の一面として切り離すことの出来ないブラックボックスとして、宗教的領域の存在を認めている。このような発想の原点は、宗教理解と科学的探究を両立させていたJ.T.ギュリックからの感化と、当時勃興していた精神物理学からの影響であることが分かった。また、人間の知性以外の意志や感情面を宗教的心性として担保する元良の姿勢が、一九〇〇年以降に思想形成をする知識人階級に継承されていたことが確認できた。

研究成果の概要(英文)：In this research we study the establishment and evolution of the concept of religion. Using Yujiro Motora's writings, we consider the interval from the late Meiji to the Taisho period. During the early 1900 religion and education controversy, Motora recognised that religion appears naturally in human beings. He was greatly influenced by (1) J.T Gyuric who helped him obtain compatibility between scientific thinking and religious beliefs and (2) psychophysical theory, which had been just established during that period. His teachings of compatibility between "intelligence" and religion influenced many of the scholars of the following century, giving him a fundamental role in the creation of the concept of religion.

研究分野：近代日本思想史

キーワード：近代日本思想史 科学史 宗教史 近代的自我

1. 研究開始当初の背景

日本における宗教の学的探求は、1905年に東京帝国大で宗教学講座が開設され、初代担当教授姉崎正治(1874-1949) (『宗教学概論』東京専門学校出版部 1900)の就任したことをメルクマールとして、公に進行してきた。しかし、近年キリスト教社会を根拠とした「宗教」という言葉の日本における受容の過程が、明治政府の政治的指向と日本社会における旧来の宗教観念とによって直接的に接ぎ木されたものではなかったという指摘がなされた(島園進、鶴岡賀雄編『宗教 再考』ペリカン社 2004、磯前順一(『近代日本の宗教言説とその系譜 宗教・国家・神道』岩波書店 2003)。このことは、既に鈴木範久(『明治宗教思潮の研究 宗教学事始』東京大学出版会 1979)といった著名な史的研究などで指摘されながらも重視されてこなかった宗教概念の曖昧さを浮き彫りにし、宗教なる概念が如何に形成され、かつまた如何に変容していったのかという研究課題を突きつけたのである。これらの関心によって、西欧と日本での概念的な史的展開を論述した深澤英隆(『啓蒙と霊性 近代宗教言説の生成と変容』岩波書店 2006)や、明治20年代までの宗教概念の再構成を企図した星野靖二(『近代日本の宗教概念 宗教者の言葉と近代』有志舎 2012)などの研究が近年発刊されており、クレス出版の『シリーズ日本の宗教学』による明治期の一次資料集の公刊と相まって、「宗教」言説を軸とした歴史研究が急速に進んでいる。

本研究課題に即して現在までの研究をまとめるならば、宗教概念は、特に1900年初頭から議論された「宗教と教育の衝突」論争から1905年の東京帝国大学文科大学宗教学講座の設立までの間でその方向性が確定し、「総ての宗教は同じく人文史上の事実として、人間精神の産物として、総て之が産物過程を包括したる概念把持なり」(姉崎正治『宗教学概論』1900)という認識に、ひとまず落ち着くと考えられている。そしてこれ以降は、いわゆる煩悶青年に象徴される、個人的領域に限定された倫理上の問題として宗教が論じられるようになるわけである。

これまでの宗教概念に関する研究は、宗教を制度的な枠組みの内に限定しようとする政府側の人物、とりわけ東京帝国大学教授であった井上哲次郎の言説や、宗教の独自性を主張した人物として、植村正治や小崎弘道、井上円了や清沢満之、村上専精といった主としてキリスト教・仏教教団の関係者の言説を主たる対象としておこなわれてきた。いいかえれば、国家と宗教という問題を軸に、宗教の内実が如何なるものかという問いを敷衍した議論が中心であった。

2. 研究の目的

(1) 自然科学的アプローチによる人間理解の方法論によって「宗教」を解釈した元良勇

次郎に注目して、宗教概念史研究の視点を問い直すことが目的である。宗教活動者乃至宗教学者を議論の焦点になされてきた研究動向に対して、その他の領域における近代的な「学術知」の受容を射程にいられた包括的な史的叙述を目指す。

(2) 19世紀から20世紀にかけて輸入される「学術知」のうち、とりわけ人文社会領域を主とした研究の受容内容を、明治後半から大正期における宗教言説の機能的側面を軸として分析し、当時の倫理観の展開を連続的に把握することである。

3. 研究の方法

(1) 対象となる時期は、西欧学術知の導入が、単なる翻訳ではなく学問意識を共有する段階であり、当時の人文・社会科学にわたる研究それ自体と、当時に対するこれまでの史的研究の成果双方に目配りすることが求められる。そのため、各分野の特質、あるいは問題意識や研究手法の面で本研究に活用可能な総合的視点からの研究史整理を行った。また研究対象となる元良の文献史料は、サトウタツヤの作成した元良論文記事リストや、近年公刊されている『元良勇次郎著作集』のリストが存在するが、記載されていないものや、関連史料を加えて改めて、調査を行いつつ、資料整理を行った。以上の研究史と資料をもとに、元良の思想を再構築することを目指す。

(2) 当初は二次的な比較対象として網島梁川を企画していたが、計画を変更し、梁川に師事した安倍能成の言説を中心に考察した。1900年代に思想形成をし、大正期に活躍する世代の思惟様式を確認するためである。関連史料は、明治以降の出版事情と相まって、膨大な数に上るため、効率を考慮して必要に応じた資料調査を実施し、分析を行った。とりわけ、当該世代における宗教的心性のありようと、その倫理観の関係を中心として考察をした。

4. 研究成果

(1) 西欧における学術知の形成と、明治期日本での移入の形態ならびに宗教認識の受容形態とを、元良の思想形成に着目して考察した結果、以下の点が明らかとなった。

維新时期前後の段階では、各藩において西欧学術の導入方針が異なり、一元的な理解は困難である。しかし、元良の出身地である三田藩に限っては、福沢諭吉や川本幸民といった西欧の科学的知見をもった知識人を活用し、積極的に藩内の意識改革を進めた藩主九鬼隆義のもと、当時としては先進的な教育を受けられる環境にあった。また神戸に進出して

いたアメリカンボードのキリスト教宣教師との関係も密接であり、藩士もその思想的伝播に積極的に関わっている。以上の元良の周辺における西欧学術知の受容状況と元良の思想遍歴とを考察した結果、古典物理学を基盤とした自然科学的知見を学問的出発点として、語学学習にとどまらないキリスト教思想への接近や西洋学術が教授されてゆく具体的な過程が、明らかとなった。

これまで、幕末期から明治学制成立までの西洋学術の受容状況は、開成所から東京大学成立などの中央における知的展開の考察と、キリスト教宣教師によって主導された神学校の影響を中心に論じられる傾向がある。元良の三田藩から神戸、京都に至る思想形成の過程を解明したことは、地方における西洋学術受容の多様性を指摘する意味で意義ある成果といえる。

アメリカンボードによる布教活動で活躍し、同志社でも教鞭をとった J.T. ギュリックの思想の内実を分析し、元良の青年期における影響を確認した。

古典物理学によって様々な科学的発見が相次ぎ、既存の宗教的価値が崩壊していくという一九世紀後半の思想状況において、布教に正統性をあたえるためにも、科学理論と宗教思想の両立は、当時のキリスト教社会においての重要な思想課題であった。特に日本においては、モースなどの御雇外国人によって当時最新の学術理論として紹介されていた進化論と、キリスト教との整合性の問題が、宣教師をふくめた広範な人々の間で、議論を呼んでいた。

この論争のさなか、進化論を受け入れた科学者であると同時に宗教者でもあった J.T. ギュリックは、進化論が「生物の起源という神秘」を解明するためには不足しており、自然淘汰だけが生物の発達に影響をあたえているのではないと主張した。このうえで、人間社会に進化論だけで説明しえない関係性や存在があることを積極的に認め、神や「宗教」の居場所を確保する論理を展開した。

以上の J.T. ギュリックの論理と、1900 年の「教育と宗教の衝突」で展開される元良の「ミスチック」として宗教的心性を担保する論理との関連性が明らかとなった点である。

この結果は、宗教概念史という議論の枠組みが、学術受容史という側面からも考察する必要があることを示している。今後の課題として、双方に目配りしつつ、1870 年代を視野に入れた「宗教」概念に関する議論をまとめることがあげられる。

元良の心理学研究の端緒において、当時勃興しつつあった精神物理学からの影響が確認できた。

既に元良の最初の論文が、カーペンターの『精神物理学の原理』を下地としたものであったことは知られているが、その内実を確認

する研究はこれまでなされていない。

元良が目にしたのは、「無自覚」のうちに思考や感情が変更される可能性があるという点であった。人間の知的活動のすべてが自覚的な理性の活動の結果であるというそれまでの議論の前提を、根底から覆す主張であった。このことは、生理学的な知見によって人間の思考を決定する要因を明らかにする可能性を示唆している。宗教的心性の科学的解明に対して心理学が有効な学問であるという認識は、元良の宗教論を説明する上で欠くことの出来ない視点である。

カーペンターの精神物理学は、カント認識論哲学の影響が顕著な時期の研究として評価されるものであるが、同様な立場に立つフイヒナーを起点に発展していくドイツ心理学が主流となっていく。元良の学問的立場は、ヴントらに継承されたドイツ心理学的方法論以降にあることが定説である。しかし、元良の始原的な問題関心よれば、単なるヴント以降の心理学者として元良を位置づけるのではなく、より詳細な西欧の心理学史の文脈の中で、元良を位置づけ直す必要があると考えられる。この点は、今後の課題である。

(2)1900 年以降に思想形成をする知識人階級においても、人間の知性以外の領域に宗教の領域を是認する認識が継承され、当時の西欧哲学的背景と相俟って、知性的に獲得しえない倫理的態度を補完する「宗教」理解が形成されたことが、明らかとなった。

本研究においては、特にその間の世代の一人である安倍能成をとりあげた。安倍は、1902 年に旧制第一高等学校に入学し、1900 年の論争で活躍した綱島梁川に師事して、思想形成期を過ごしている。また 1906 年に旧制一高で校長となり人格教育で著名な新渡戸稲造とは入れ違いとなっている。いわば個人的宗教観が定着する時期の直前に学生時代を過ごした世代であった。

安倍は、当時形成されつつあった文壇での著述活動と、学問的な思索を通じて「宗教」の意義を再構成している。自然主義文学論争において立ち現れる近代的個人の倫理的問題に、倫理的理想としての宗教的態度を結節することで、自身の「宗教」認識を素描している。この営為は、当時の西欧における哲学的展開と機を一にしたものであると同時に、元良の宗教に対する態度の継承的發展といふべきものであった。

引用文献

Addison Gulick *Evolutionist and Missionary: John Thomas Gulick, Portrayed Through Documents and Discussions*, Chicago, University of Chicago Press, 1932., pp. 392-393.

元良勇次郎『教育と宗教の関係』光融館 1900 年、38 頁

Carpenter W.B. *Principles Of Mental Physiology*, 4th ed., New York, D.Appleton 1874.,

p.539.

(4)研究協力者

()

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

(1) 森川多聞、元良勇次郎の思想形成期、霊性と平和、査読無、2号、2017、pp.53-63。

〔学会発表〕(計 2件)

(1) 森川多聞、元良勇次郎の信仰と実証主義、東アジア 霊性・平和 研究会、2017年。

(2) 森川多聞、湫石山脈の旅 安倍能成を中心として、文芸研究会、2017年。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

森川多聞 (MORIKAWA, Tamon)

東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：70712280

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：